

DOLL FORUM JAPAN

DOLL FORUM JAPAN

ドール・フォーラム・ジャパン

AUGUST 1994 Vol. 2

特集 ^{キレ} 裂と人形



山口 景子
Keiko YANAGUCHI
'Figure #110'

CONTENTS
目次

特集

★

裂と人形

カバーストーリー

山口景子の世界	... P2
アメリカのクロス・ドール	... P4
From Overseas アキラ・ブランド	... P5
アメリカ布人形事情	... P6
Review 布人形編	... P7
人形つれづれ	... P8

アメリカ・リポート	
NIADA、NY取材記	... P10

「人」と「形」のあいだで	
インゲボルグ・リーセ	... P12
Review	... P13
Pin spot 昔人形青山ギャラリーK1	
スケジュール	... P14
Coming On the Scene 横田早苗	...
教室案内	... P15
Information	... P16
近況報告 岡田好永	
水無川リナ	... P17
Letters 読者からのお手紙	... P18
編集後記	... P19

ドール・フォーラム・ジャパン

1994年8月23日

ドール・フォーラム・ジャパン事務局発行

ドール・フォーラム・ジャパンは、日本のアーティスト・ドールを支援するために作られた非営利のドール・フォーラム・ジャパン事務局が発行する情報誌で、ユーラシア・ドールズのスポンサーシップと会費により、運営されています。

特集
裂と人形

山口景子の世界



山口景子さん

Figure#110

裂を張り、

石塑粘土のひとつがたに、

ざくざくと粗く縫いつける。

古裂は絵の具、針は筆。

つくりたいものは、空気、

だと山口景子さんは語る。

神社や仏閣や教会に入ったときにいわれもなく感じてしまう、なにか。神妙にして深遠。厳かな緊張感。そんな、空気。

彼女は、自分の制作する人形がそのような空気の「空間」を生み出すことを目指している。

人形に固執せずに固執する。

なぜ、人形なのですかという私の問いに対して、そのように山口さんは答えた。

彼女の「人形」とみるか「オブジェ」またはその類とみるか。山口さんの作品に限らずこれは芸術性を志向する人形によく問われる議論だが、何人かの人が「山口さんの作品は『人形』だよ」と迷わずに言うのを、私は聞いた。

ストーリー性

山口さんは、方向性として他の人のやっていないことを目指してきた。たとえば、彼女は自分の人形を制作するのに、ストーリー性で人物をおこしたり、またリアルである必要はないと言う。

ただ、冒頭に述べた、神妙、深遠なる空間を創造するために、そこにもっていくまでのストーリー性は必要かもしれない、と言う。画家である夫君の山口力靖氏が作る舞台に配された人形は、作品ごとにタイトルを与えられ、静かな時の中で物語を演じるかのようだ。



山口さんの仕事場

形を必要としない、

という考えだから、作品ごとに異なった自由なフォルムの人形がで
きあがる。人形の本質といわれる
デフォルメにおいて、彼女の人形
を高く評価する作家もいる。

彼女の人形を見ていると、つい
そのフォルムや色彩の妙に目を奪
われるが、実は、顔もなかなか味
わい深い。扱いにくい生地をうま
くこなす技術。消えいりそうであ
りながら表情の豊かな目。

前衛舞踏やダンスに、制作のイ
ンスピレーションを得ることがあ
るといだが、このようなダンスに
は、能のように動きを封じて、舞
を踊ることを特徴とするものがある。
いかなれば、彼女は人形制作
において、形を封じて空間を生む
ことを目指しているということか。

山口景子さんの生家は神戸の呉

服商。小さいころから自然に布を
遊び相手として育った。多摩美術
大学では、絵画を専攻したが、
かつて親しんだ裂を素材に人形作
りも始めた。

同じ大学で彫刻を学んだ力靖氏
と卒業後、結婚。二人は、美術以
外にも何でも見て学んでやろう、
と精力的にダンスや舞台を見てま
わった。

そうするうちに、夫の力靖氏が
勉強のため、ニューヨーク行きを
決意、八年の歳月をマンハッタン
で過ごすことになった。この
ニューヨーク生活で、大学で絵画
専攻だった景子さんは人形という
立体に、彫刻専攻だった力靖氏は
絵画という平面に、と表現方法が
交差することになる。

数年前より、二人は知人へのク
リスマスカードのために、人形を
景子さん、その背景となるステー
ジを力靖氏が担当して、共通の
テーマで共通のテーマで作品を作
りはじめた。ニューヨークで暮ら
し、話し、芸術作品に多く触れた
二人から、息のあった作品が生ま
れた。これが好評で、それからも

二人は合作でも作品を作り続けて
いる。

昨年、ニューヨーク生活に区切
りをつけ、帰国。奈良県に居を構
えた。奈良も、二人にとつて特に
縁のあった土地ではない。そのよ
うないきさつを聞いて、つい、古
い民家でも住む隠遁者のような二
人の生活を考えて訪れた私のかっ
てな想像は、見事に裏切られた。

山の中腹の一画の新興住宅群に
ある一軒家で、お二人は、快適に
生活されていた。制作のペースは
平均年20体。小さいときから
ずっと、町の喧騒になれ親しんで
きた景子さんにとっては、自然に
囲まれた環境で生活することはと
ても新鮮だという。

散歩に出れば花を摘み、近所の
人からは野菜作りを教えてもら
う。長谷寺に近い。仏閣が多く、
彼女が表現を目指す儀式的に浄化
された「空間」にも恵まれている。
駅までの道を歩きながら、景子
さんは、奈良に住んで生まれるも
のが変わるかもしれない、という。
現在、二人は神戸で行われる二
人展の準備に忙しい。

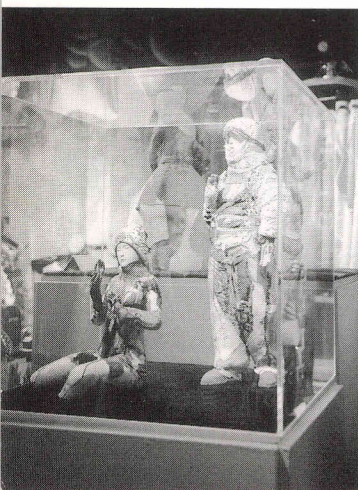
(一九九四年六月)

From MANHATTAN

ジュリーズ・アルチザンズ・ギャラリー

NYマンハッタン、
マジソン・アベ
ニューの高級ブ
ティック街にある
ジュリーズアルチザ
ン・ギャラリーは、
テキスタイルのギャ
ラリー・ショップ。
色彩も素材もさま
まなワードローブや
アクセサリーの中
で、山口景子さんの
作品は、コーナーを
設けられ、常時数点
は展示されている。
ギャラリーというて
も一見ブティックの
ようにみえる。しか
しこのギャラリー
アーティストたちは二週間単位で
ウィンドウスペースを与えられ、
作家にもよるわけだが、年に二度
ばかりそのチャンスはめぐってく
る。その時が新作発表の時であり、
小さいながらも自分だけの空間で
ディスプレイできるわけだからい
かにもしろいいものを出すか、作
家たちはしのぎをけずり、また、
オーナー自身も、そんな新作を見
るのが楽しみという。道行く人々

ジュリーズアルチザンズ・店内



アメリカの 現代クロース・ドール

アメリカの代表的なクロース・ドール作家を
取り上げました。

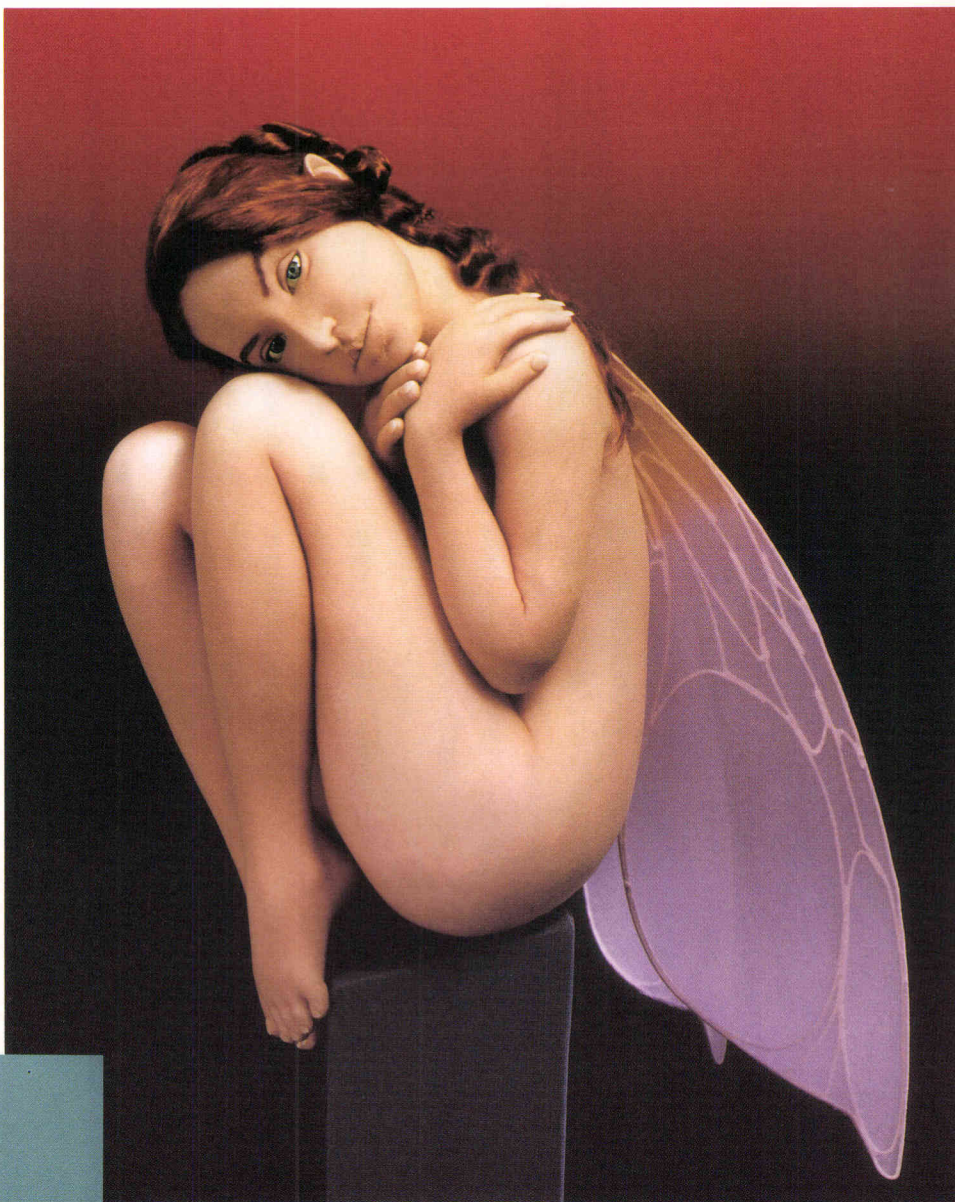
アキラ・ブランド

「キャット・マン」
素材・綿、化繊綿

1945年オハイオ州生まれ
ウィスコンシン大学で美術を専攻
1981年より「アキラ・スタジオ」主宰。
NIADA会員、アメリカ工芸評議会委員
作品永久保存：ルーブル装飾美術館
アメリカ・ホワイトハウスなど

下左：マスクをはずしたところ

下右：マスクをかぶったところ



リサ・リヒテンフェル
「タリアー 止まり木の妖精」
素材：アルミワイヤー、スタイロフォーム、
綿、ナイロンストッキング

アメリカで現在、誰もが最高と認
めるアーティスト。

彼女を呼ぶには、「天才」という
言葉しかない、と往々にして言わ
れるように、ファンタジー、ノス
タルジー、コミカル、リアル、ど
れをとっても、彼女独特の息をの
むような世界を作り上げる。

NIADA会員



特集 ^{きれ}裂と人形

海外のドール・アーティスト
アキラ・ブラント

インタビュー：小川千恵子：O、リスフェルド純子：L
文中、アキラ・ブラント：B

シンプルが一番！

前世が、日本人で劇場の衣装係と言われたことがあるそう。日本人の男性の名前と知らず精神療法の時に自分に使われた名前を、そのまま現在の名としたのも、日本に縁があったからか。偶然とはいえ、彼女の布人形のもつ素朴な味わいは、日本人の感性に訴えるものがあると思う。アメリカでも個性派の布人形作家として知られるアキラ・ブラントのインタビューには同じく布人形の作り手であるリスフェルド・純子さんにも同席して頂いた。

♣

O…人形作りはいつから始めたのですか？
B…子供のころには人形の洋服を作ったりしたわ。それから生まれてくる自分の子供ののために、人形を二体作ったの。そして、七十年代中頃には、サック・ドールに目覚めちゃって。
O…サック・ドール？
B…最初は、娘のために買ってあげたの。本当に基本的な構造しかしていない、針と糸だけの仕事で、実にシンプルな人形。

L…サック・ドールは昔の木のストッキングで作られていたの。今の人は、あまり見たことがないんじゃないかしら。

B…つま先が頭で、足の部分はぼちゃぼちゃしてとてもおかしな人形なのよ。そんな人形を自分で五百体ほど作ったわ。誰にも作り方を習わなかったから、少しずつ時間をかけて上達していったの。

O…今の作品とは作り方がちがいますか？

B…違うわ。でもまったく違うというわけじゃないけど。私は、そのシンプルなお人形を作っている時に、本当に何度も何度も実験的なことをしてみたわ。そして作る作品ごとに、少し良くなったり、異なったふうに見えてきたり。

♣

O…粘土を使ったことはありますか？
B…やってみたけれど、やはり私には向いていないの。新しいもの、革新的なもの好き。布は、新しいアイディアの可能性が多分にあるわ。今、私は、布の表面の加工を工夫しているところ。

O…人形はどんなふうにつくっていくのですか？

B…芯は使わない。私は、何でも、シンプルで直接的なものが好き。込み入った技術的なことは嫌い。それよりも表面のデザインや、ディテールにはこだわっている。それに早くでき上がったほうが新鮮でしょ。



L…ご家族は、どんなことを手伝うの？

B…息子は、お面（彼女の人形にしかけてある動物のお面）や小物の部分などを手伝ってくれるわ。夫は、縫いぐるみの中身を詰め込んだり家具を作ったり。

O…中身は木毛ですか？

B…化繊綿です。

♣

O…顔はどのように作るの？
B…顔には、スイスのピーマ・コットンというコットン・ジャージを使っているの。高価なものだけど。

着色は色鉛筆や、アクリルの布用の絵の具。顔作りには色や素材、全てがかかわってくる。布じやなきや、人形を作っていないわ。

O…布人形を作る時に気をつけていることは？

B…リアリズムには興味がないの。フィリング、ファンタジー、カラー、テキスト、チャール、コラージュ、すべてに興味があるわ。私は顔を作るのが好き。

♣

O…発想はどこから？
B…自分の今住んでいる環境、木、動物たちや、子供のころの自然。

O…今は、どんな環境にお住まいですか？

B…私の住んでいるところは大きな町や、舗装道路がないの。静かでシンプルなのがいいわ。他の世界で起こっていることも気になるけど、距離を保っているの。

L…彼女の生地のコレクションの量はすごいよ。

B…私は人形を教える旅行をした時に、その土地の生地屋を必ず訪ねるの。

L…どこにどういう生地をしまったかなんて、どのように把握しているの？

B…専用の壁面があって、そこに生地を巻いてしまっているの、その先を見ればどんな生地だか分かるようにしているの。端切れは、箱の中でスクラップになっていたたりするけど、今までどんな生地を使ってきたか良く覚えてるの。記憶力がいいのよ。

O…いつか、日本にもいらして下さい。きっとあなたの作品のファンはたくさんいますよ。

B…日本に行けたら、どんな人形が作られているか見てみたいわ。そして、生地屋さんもね！

Akira Blount

アキラ・ブラント

アメリカ 布人形事情

リスフェルド・純子

アメリカ在住十八年、アメリカ現代人形の事情に
詳しい布人形作家、リスフェルド純子さんがアメリカ
の布人形の現状を伝えてくれました。



6

「布」なしの人形などとはほとんど考えられないが、仕上げはもちろん、原体も布とする「布人形」を作るアーティストの多くは、特に布に対して熱狂的な愛着と、布を使って何かを作りたい、というのが人形を作り始めたきっかけになっているようだ。

布が自然な形で私の人形素材になったのは、布で人形を作り続けてきた母の影響が大きいが、布のもつ温かい感触が創造力をかき立ててくれるからである。

顔を作る場合、粘土だと削ったりつけ足したりしながら外から外へと作り上げていくのに対し、布人形は内から外へと作っていく。

綿付けを何回も繰り返し、最終的にこれだ、と思った時、一枚の布を原体にのせると、すでにそこに顔が見えてくる。糸をひっぱり、目や口がはつきりし始めて、欲しかった表情に達した瞬間の喜びは大きい。私個人の好みとしては細部にわたって超写真的に描かれた顔より、時間がたつにつれ味の出てくる顔がいい。それは一分の隙もない完璧な映像でイメージを押しつけられるのと、本を読んで自分なりのイメージ作りをするのとの違いに似ている。

粘土やフォルム等で完成させた顔の上に布をはり、それで「布人形」と呼ぶことに對して、すべて

布と綿で仕上げていく布人形作家から、それはおかしいのではないかという声があがっている。素材は何を使つてどのように表現しようとも作家の自由だし、布の下に他の素材を使っているということではなく、けしからん、ということではなく、布でなにもかも作っていく布人形作家の創作性、努力をもっと考慮に入れてほしいということである。

布人形を最高のアート・フォルムにまでもっていったアメリカの作家リサ・リヒテンフェル。彼女のおかげで布人形を今までと違った角度から見直してきたアーティストやコレクターが増えてきたこ

とが嬉しい。彼女の人は、超写实的だが、味がじわじわ出てくる超写真だ。彼女から学ぶことが多いが、私と私の母の作品を見たあとの彼女の言葉が忘れられない。「あなたの人の肩を張らない、自由奔放さを学びたい。」

(バージニア州在住)

＊リスフェルド純子さんはグローバル・ドール・ソサエティ(GDS)のエスタブリッシュド・アーティスト(無審査会員)であり、その温かみのある作品は欧米で愛されており、同じく無審査会員である御母様の松原登代子さんと共に、欧米各地で開かれる多くの人形展に参加されています。



L. 純子さんの作品

松原登代子さんのこと



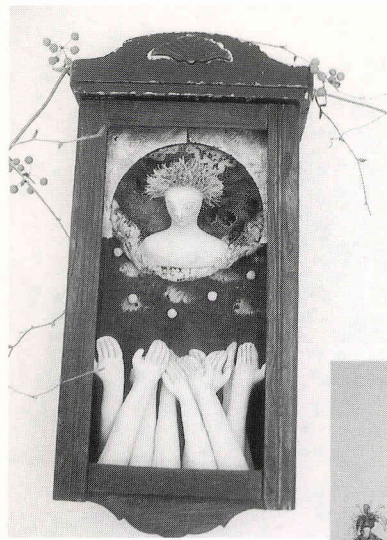
リスフェルド純子さんの御母様である松原登代子さんは戦後まもなく小さな子を抱え、プロの布人形作家として精力的に制作を続けてきました。現在、大阪市北区で、制作中心の「人形工房じゃがいも」を娘さんの佐々木明子さんと主宰されていますが、松原さんのお名前は、国内より、欧米で良く知られています。

布の温かい持ち味を生かして、今では忘れられがちな古き良き日本の庶民の生活や、現代感覚の人形をユーモラスに描く松原さんの作品は、欧米各地で展示され、高い評価を得ており、多くのコレクターに愛されています。



松原登代子さんの作品

＊松原さんは、月一回、東京日本橋三越で講習会を開かれています。詳しくは、十八ページ参照



原明子展より

松本昌子展より



与勇輝展より

Review

特集 裂と人形

取材・文 小川 千恵子

松本 昌子 作品展

— 融入口 —

四月二十六日～五月二日
ギャラリーおかりや（銀座）

創刊号の「近況報告」でご紹介した松本昌子さんの個展。

草原のかなたから、かすかに民族音楽が脈打って聞こえてきそうな不思議な静けさを持った人形。

展示された三十体の人形が、それぞれが異なる色調の裂、アクセサリー、ポーズで、目を惹きつけてくれた。

ディスプレイには、アフリカの籠、ざる、椅子などの民具が効果的に用いられた。

人形に巻きつけられる裂やアクセサリーなどの材料は、日本の古裂やアフリカらしきもの、果ては国籍不明なものが、混在している。幾層にも異なる文化の「切れ端」が融合する同心円の世界。

初日には、ご主人のB・B・モフラン氏の率いるバンドの民族楽器による生演奏が何回も行われ、夫婦合作の「融合」の空間が生まれた。

妖精の森

与 勇輝展

四月二十七日～五月九日
銀座 松屋
*現在全国巡回中

年齢、性別、国籍を問わず、作者の思いがストリートに伝わり、評価されるということは、人形においてなかなか難しいものだ。

人形では文化の違いが、食生活のそれに匹敵するほど影響すると筆者は考えている。

そのような状況で、与氏の作品は、文化の違いを超えて、その詩情が国際的に愛されている稀な作家の一人である。

今回の作品展は、倉本聡氏の書き下ろしになるフォト・ストーリー「ニングル」のために制作された新作四十八体を中心に、過去の代表作も含め、百五十体が展示された。

物語を追って、感情表現やポーズを様々に変えるひとつのキャラクターを一覧できることは、見る者にとって楽しい企画であるが、作り手にとっては、相当な力量を要する仕事であったと思う。残念ながら、与氏にお話を伺うことはできなかったが、詩情を失わず、これだけの仕事をこなすことができるからこそ、現在の彼の名声があるのではないかと感じた。

原 明子

モダン・フォークアート

コレクション

五月四日～十日
日本橋高島屋ギャラリー夢工房

アメリカ在住の原明子さんが、三年前より始めた布人形を中心にツールベインディングから織物まで、幅広い作品展を行った。

キャンバス地にアクリル絵の具で着色された布人形は、外見は一見シンプルだが、個々の作品にはそれぞれメッセージが込められている。それも、ベトナム戦争や金銭欲、深層心理などを扱った一筋縄でいかないブラックユーモアを特に好んで扱う。だがそんな重たいテーマも、彼女にかかると、その人柄ゆえか、とてもあつからんと受け取れる。そこに他の人には真似できない彼女の持ち味があるのだろう、アメリカでは、いくつかのギャラリーから声がかかり大変好評だそう。

来年もまた、玉川高島屋で作品展の予定があり、また写真集を出す計画もあるとか。それほど有望視されている人なのに、こんな手紙が届いた。

「私のことだから、いつまた人形の代りに他の分野に行くかもしれない、今だけだものネ！」

連載コラム
人形つれづれ (第2回)



人形制作：浅見 恵子

福島弘太郎

ドールフォーラムジャパン今号の特集はクロスドールということなので、今回私も布という素材と創作人形との関わりについて考えてみようと思います。

布と人形の出会いはその発生のごく初期からあり、資料にはナイルランドで発掘された紀元前五〜六百年頃の毛糸人形の記述がありました。我が国でも平安時代より「天児」や「這子（牌子）」が作られてきたことはご存じのとおりです。その後布は人形製作に欠かせない素材として今日まで使われ続けています。

しかし布が創作において造形の主材として注目されたのは大正の末頃からです。いわゆる通称「フランス人形」と言われるものですが、これはリンネルのような生地と綿布で紙を挟んで金型で圧搾した頭に縫いぐるみのボディを組み合わせたものでした。これは手芸的にもより簡単に頭を作ることができたので専門職以外の分野にも広がって

いき、主婦や女学生たちを中心に広く作られるようになりまして。そしてやがて川崎ブッペ、中原淳一、岡山さだみ等の創作人形家が輩出することとなり、人形芸術の機運が高まってきました。現代でも辻村ジュサブローや浜いさお、川本喜八郎、与勇輝など布を造形の基におく作家は数多くいます。

これを布という素材の使われ方に着目して見ていくとその芸術化の指向性がよりはっきりとします。先に挙げた這子は長方形の四辺を突合わせに縫って体とし、頭部は綿を布で包んだだけのものでした。特に鍊を入れることもなく、まさに布ならではのシンプルな抱き人形です。これがやがて手足が独立して作られるようになり、頭部もより立体感を出すように突起や糸引きでくぼみをつけるようになります。さらに芯を入れ動きを固定し、より作家の意図に添うように固定化していきます。最終的には張り子や粘土など別の素材でおこない、布は表面仕上げ

のみに使われるようになりまして。この過程で従来の抱き人形から徐々に鑑賞に資する要素が多くなり、布に対するコントロールの度合いも強くなって行きます。不思議なことですが、布人形は今まで布であることをひたすら自己否定することによってその芸術性を高めてきたように思えます。

これには勿論時代的な経緯も絡んでいるでしょう。布という素材は常に身近にあつて加工もしやすいことや平面的な把握から立体に起こすことができる点などで間口が広いゆえに多くの人に人形作りのきっかけを与えました。その手軽さがまた手芸としての布人形を印象づけることにもなりました。布を素材にする作家には作品に対する正当な評価の前にまずその偏見を喚起しえないように準備することが必要でした。

先達の努力のかいあってか今ではその偏見は多少改善されてきてはいますが、布という素材の持つ特殊性のためにこれが完

全に無くなることはないのではないかと思います。それは人が生まれてから後、常に肌に触れ、触覚や嗅覚、視覚を通して分かちがたい存在として人間の近くに有るということからくる呪縛です。

現在日展では人形は第四部工芸部門に入っています。工芸には「用」がありますが敢えて人形の「用」を見出すならば装飾と鑑賞でしょうか。人形を持つことの本当の意味はともそれだけではないと思いますが、どちらにしろある程度人間との「距離」を要求します。人形がより純粹な芸術を旨指すのであればこの距離をさらに広げざるをえません。

ですが布にはこれができません。もし這子のような抱き人形が人形のよりプリミティブな形だとしたら、布という素材は物質的な特性とは別に実に人形に適しています。なぜならいかに高度な技術をもって鑑賞用に作られようとその素材感は最後まで消えることなくその作品に

人形であることを求め続ける力となるからです。

私の師匠はバックینگ技法で非常に洗練された人物像を作ります。もうだいぶ前になります。なぜ他の素材もあるのに手間をかけて布で作るのかという愚問を投げ掛けたことがあります。「布で作りたいから」というのがそのときの答でした。そういうものかとその時は拍子抜けする思いがしましたが、この理屈ではない素直な欲求を抱かせるのが布の持つ抗いがたい魅力であり、その作品が人を魅了する魔力だったのかも知れません。

【福島弘太郎・人形作家】

*創刊号において、福島光太郎としたのは、誤りでした。ここに謹んで訂正致します。

アメリカ・リポート

全米のトップアーティストが集まる
N I A D Aの
カンファランスに
参加して

アトランタ

7月13日～17日

取材・文 小川千恵子



会長のヘレン・キッシュ

ワークショップ風景

会員作家は、どのような作品を作るのか、というと素材的にスーパースカルビー、サーニツトといった合成粘土や布人形が目立つ。言うまでもなく、発想から制作の全過程は、作家自身によるものでなくてはならない。(日本からの紙粘土を使う作家も何人かいた。)テーマはファンタジーや、ストーリー性のあふれるものが多く、じっくり見せるよりも、第一印象で内容がわか

可愛らしい抱き人形が大きな市場を占めるアメリカで、N I A D Aは、人形をアートとして意識し、その地位を高めようとする作家と、それをサポートするパトロメンバーから成立する。さすが、民主主義が徹底しており、選挙・会議が運営において重要な位置を占めている。

アメリカでは、人形作家の組織が沢山あり、会員数も大規模と聞いているが、その中でニアダ、ナイアダなどと呼ばれるこの組織は、会員の作家数がわずかに五十数名に過ぎないにかかわらず、その年一回のカンファランスは、全米、ましてや(今回の私も含め)世界中から注目されている。

N I A D A (National Institute of American Doll Artists)のキーワードは「シェア」(Share: 分け合うこと)だ。誰でも戸をたたく人には、ドアを開け、力になることを惜しまない。

分かりやすいものが多い。N I A D Aの作家会員は、数は少なくとも全米で選りすぐりのアーティストであるが、カンファランスに参加する会員以外の人も、プロの作家から初心者まで、また私のような人形関係者やジャーナリストが入り乱れ、何かを学んでいこうとする向上心のエネルギーで満ち溢れている。それは、わくわくするほど素敵な光景だった。

「N I A D Aってどんな所?」そう聞いた私の問いに、何人もの人から異口同音に「小さな大学」「大きな家族」という答が返ってくる。プログラムは朝から晩までぎっしり。期間中、参加者は会場から会場へ、走り回る。観光する暇などないほどだ。

N I A D Aの名刺を見れば、初対面でもすぐに笑顔を交わし、会話が始まる。威厳を掲げて近づき難い人は皆無。プログラムは、ワークショップ、レクチャーやスライド・ショーなどの研究目的のものから、レセプションやデイナー、オークションなど、リラックスできるものまで、幅広い。興味深いのは、N I A D Aのアーティストと一般参加者が対峙して、意見交換をし合う、シェアリング・セッション。質疑応答や、N I A D Aをよりよい場所にするための、活発な意見交換がある。芸術的な人形の位置付けとは、と日本でも毎度のよう

行われる議論がここにもあった。一般参加者の中には、N I A D Aに憧れ、会員を目指す新人も多い。厳しい資格審査になかなか通れないのか、抗議的に議長に聞く人もいる。「アーティスト・ドールって一体何なのですか? N I A D Aが考えるドール・アートって一体何なのですか?」

議長であり、会長のヘレン・キッシュが答える。「私たちが目指すのは、全てにおけるエクセレンス(excellence)。もちろん、技術も優れていなければならないけど、大事なものはその表現力と表現したいもの。その人形が、何か言うべきことを持つてるといことが一番大事なのよ。」ここで、会場から熱い拍手がわいた。

とはいえ、人形に求めているものに、日米の大きな違いを感じたのも事実だ。ドール・フォーラム・ジャパンを紹介してN I A D Aの人々にも大変喜ばれたのは嬉しかったが、日本は日本で、彼らのように、自分たちで高めあい、認めあう関係がまだないことにさみしさを感じた。作家とは、孤独であるから、そのような関係は邪魔、という声もある。確かにそうかもしれないが、N I A D Aのアーティストもこの年一回の再会が終わると、それぞれに厳しい制作生活に戻るのである。だからこそ、このつながりを大切に

いだろうか。彼らも三千年かけてここまできたのだ。日本でもN I A D Aのような場所があったらいいと思う。そしてD F Jはその力になりたいと、熱望するのである。

来年は、リスフェルド純子さんと私で、日本のアーティストの仕事のスライドで紹介することを依頼されている。これをN I A D Aのアーティストは、大変期待している。今回のアメリカ行きは、日本でドール・アートにしがみついて孤独な思いをしてきた私に、多くの仲間(というよりも同志)に会えた実りの多い旅となった。



N I A D Aの写真とビデオを見る会を計画しています。詳しくは追ってお知らせ致します。

願わくば、来年フィラデルフィアで行われるカンファランスで、何か日本のお土産話になるような新しいムーブメントがあれば良いのだが。

筆者

リサ・リヒテンフェル



「ヴィレッジのアトリエに
ウタ・プラウザーを訪ねて」

「これでも喉がやられちゃう！」

東京並みにじめじめとうだるような炎暑のニューヨーク。暑い、暑い、と言いながら、冷房のない工房で、ヘアスタイルを変えた彼女は私を迎えてくれた。

彼女の工房は、グリニッジ・ビレッジにあるアパートの五階。ワンフロアに、効率よく、作業スペース、倉庫スペース、事務所、居住スペースを区分けしていた。段ボールの中には、未完成の「パーツ」が整理されしまっている。その数を見て彼



マギー・メイヤーと作品

クリティーク風景

「クリティークに参加した
マギー・メイヤーに
インタビュー」

NIA DAのユニークなイベントに、クリティークがある。NIA DAがサービスとして行う、新人作品の批評会である。先着申し込み順で七十五人ほどが批評を受けられる。一人を、三人のアーティストで批評を担当し、それぞれの担当分野で制作のアドバイスを。あくまでアドバイスが目的の会だから、何か賞が与えられるわけではないが、名札に緑のリボンをつけたクリティーク参加者は、この日まで一様に緊張を隠せない面持ちだ。

アーティストによる批評が終わると、ドアが開かれ、外で待機していた一般参加者や、プレスが一斉に新人の作品を見て回る。中にはデイラーやコレクターもいるので、実質上、彼らのデビューの場にもなりうるわけだ。(でも人口で、主催者が

「アーティストには値段を聞かないで！」と叫んでいたけど」

ふたを開けてみれば、すでにプロとして活動している人がほとんどだ。NIA DAの会員を目指す人も多く、最低3年はかかる厳しい資格審査に通るためのヒントをここからつかんていこうとするのだろう。

今回初めてクリティーク参加したマギー・メイヤーに話を聞いてみた。彼女は二年日本に滞在したことがある、非常に奥ゆかしい女性である。

「人形を作つてどのくらいになりますか？」

M 一年半くらい。日本から帰つてきてキルトの作品展をみて、人形を作るようになったのです。仕事が、繊維関係だったので、布人形を作るのは自分にとって簡単なことだったの。

I では、独学ですか？

M アキラ・ブランドなど数人のセミナーに通いました。

I どうして、NIA DAを選んだのですか？

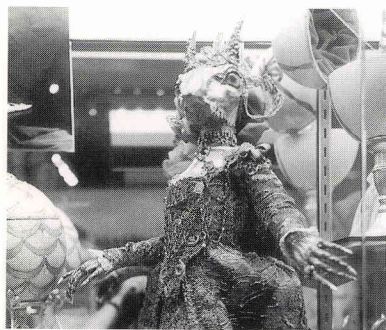
M ここはインスピレーションを与えてくれます。人々もとても優しく、本当に良いところですよ。他の参加者とも知りあえて、とても良かったですし、NIA DAの作家にじかに私の作品を批評してもらえて、本当に感激しました。

I クリティークではどんなことを言われましたか？

M 顔をもっと細かく作るように勧められたわ。あとは、ボディのプロポーションのことも。

I 来年もまた来る？

M 状況が許せば、ぜひ。NIA DAの会員になりたいですか？
できるものならば、なりたいです。



「ソーホーのCFMギャラリー」

キャラベイ氏の美しい人形

NIA DAの副会長であるロバート・マッキンリーの人形が常設展示されていると言うので、ソーホーのCFMギャラリーを訪ねた。ここもロフトだったのだろうか、がらんとした空間に、レオノール・フィニをはじめとする繊細なエロティシズムを感じさせるファイブ・アートが並ぶ。うっかり、目的の人形を見に来たことを忘れてしまうほどだ。

目当てのポップの人形は、既に売ってしまった見られなかったが、小さな立体作品のための陳

ODACAアーティストの諸井さん



アトランタで同時開催された
ODACA

今回NIA DAの会場となった同じホテルで、オリジナル・ドール・アーティストの別の組織、ODACAの展示即売会があった。ODACAでは在米の日本人の諸井和江さんが活躍しており、彼女のオリジナルなボーセリンの人形は、好評を博していた。

ナショナル・ドール
フェスティバル

これもまた、NIA DAと隣接するホテルで、大規模な展示即売会があった。こちらには、アーティストから小物、NIA DAに属さないウタのような実力派の作家のブースが混在しており、これもまた非常に見ごたえがあった。

*この他同地では、引き続き、UFDGという大きな作家の組織のコンベンションがあったが、限られた制約の中での滞在ゆえ、今回は見学を断念した。

「人」と「形」 のあいだで

インゲボルグ・リーセさん(フランス)



略歴

ドイツ生まれ。

娘の7才の誕生日にドールハウスを贈ったのがきっかけで、ミニチュアの収集を始める。また、現代作家による人形にも興味を持ち、収集。

1985年、ミニチュアと現代人形を扱う「プベ・タンドレス」をパリに開店。

その後、フランス・ミニチュア・クラブ、フランス現代人形クラブの会長となる。ミニチュア、アーテリスト・ドール共に、フランスでは未開拓な分野だっただけに、文化として根づかせた彼女の功績は大きい。

インゲボルグ・リーセさん。

1960年以来パリに住み着いたドイツ人女性。彼女の経営する人形専門店 PUPPEE TENDRESSE は、パリ十六区、閑静な高級住宅街の片隅にある。彼女は、またフランス・ミニチュア・クラブの主宰者であり、現代人形のコレクターでもある。

(インタビュ・文 永田千奈)

1店を開いたのは85年の12月からと聞いていますが、人形のコレクションはいつ頃から始められたのですか。

リーセさん(以下R) アメリカでミニチュアに魅せられたのが20年前、ミニチュア用の小道具を探すためにのみの市やアンティーク・ショップを廻るうちにアンティークの人形に興味を持ち始めたのが15年くらい前。現代の創作人形を買ったのは、1984年、ドイツで SILVIA MATHER の人形に一目惚れしたので最初です。

1 自分でも人形を造ろうとしたこと

は?

R 自分の娘のために人形の家を作ったことはあるけど、本当のアーティストが造った作品を見た時、とてもかなわない、と思ったし、理想が高すぎて自分の作品には満足できないから、やめてしまいました。それよりも、お店や博覧会で、人形を「見せる」ことの方が私には向いているみたい。人形の写真を撮る時もそうだけれど、人形を「見る」とこと、「見せる」ことには少し自信があります。役者にはなれないけど、演出ならできる、ってことかしら。

この間のミニチュア展(1月18日~4月9日 於 パリ4区サンス館)には、2万8000人の入場者があったし、モンテリマルのミニチュア・フェスティバルも私達のクラブから同市に呼びかけて毎年開くようになったんですよ。創作人形のフェスティバルも定期的に開催出来るようになったらいいのだけだよ。

1 どうして人形、なんでしょうね。ほかの玩具やテディー・ベアやオブジェ的なものと何が違うのでしょうか。

R 人形を見る時一番気になるのは、「表情」です。特に子供の「表

情」。誠実さや美が滲みでてくるような表情が一番好きです。

1 少女時代から人形遊びの好きな子供でしたか?

R いいえ。子供の時は、戦中だったからあまり物のない時代だったし、ひとつしか人形を持っていまんでした。その人形にもあんまり執着していた覚えはありませんね。私は、人形を子供のおもちゃに限定するつもりはないし、私が人形を集め始めたのも二人の娘が太分大きくなってからです。もう、これ以上子供を持つことはないな、と思うようになってから、子供や赤ん坊の人形に魅かれるようになりました。人形は子供の代わりみたいなところがありますね。

1 現在人形のコレクションは、どのくらいお持ちですか。

R 130くらいだと思います。最近もう数えていないのよ。ちゃんと展示出来る場所がなくて残念です。

今の店も、本当に一品ものの創作人形を買ってゆく顧客は、両手でかぞえられる程で、あとの人は、本当に人形が好きで人形を見にくる人が多いんです。そんな人のためにも、いつか、人形美術館を開くのが夢ですね。

さとうそのこ展

6月13日～19日
銀座ステッブスギャラリー

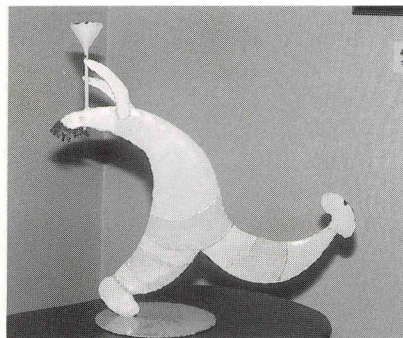
れんがの歩道の角にある、ガラス張りのギャラリーには、立ち止まってゆく人が多い。その中に、都会のトトロと違ってしまふ独特な人形たちと、そのこさんがいました。

現代的で都会にマッチする不思議な人形。大胆にデフォルメされた、人や動物達。海や太陽も彼女のもの。「これを大きくして公園とかの芝生のうえに置いてみたい」と、彼女の中で、夢があたためられている。

二年の間、こんなことをやって来たよ。これからもやるよ。こんな意志を込めた個展の二階には人形の他にその元になったスケッチも並べられていて、さとうそのこの世界が一目でわかる。

たくさん現代の人形を見てきた人が言った。「こういうものを見ると、ほっとします。」
今年の秋には、夫の赤川政由氏とジョイント展を計画中。

(KEIO)



今様人形展

5月21日～6月5日
ギャラリースペース

湘南・茅ヶ崎にできた新しいギャラリーで、「海、風」というテーマで、現在活躍中の十五人の作り手による合同作品展があった。この企画展は、素材や表現方法において、幅を広く持たせることで、違いを見る人に楽しんでもらおうという主旨で行われた。

銅の赤川政由氏、革の黒沢正子さん、木の瀬戸栄子さん、鉛のよねやまりゆう氏、石塑の岩切夫妻、高橋操さん、他にミックスメディアでは、山口景子さんなど、多彩な顔ぶれが並んだ。十四ペー

ジに掲載の岡田好永さんの作品は、この企画展のテーマに合わせ制作されたものである。
このギャラリーの様に、大変明るく爽やかな場所で行われるのも珍しいことだが、自然光と風の効果が新鮮だった。地元



(小川)

鈴木木千賀子 木彫展

「愛と祈りの詩」
6月27日～7月2日
銀座サエグサ画廊

DMは、映画「汚れた悪戯」で、マルセリーノが十字架のキリストにパンをさしのべる有名な場面。これは、木彫の人形にこだわ

る鈴木さんが、長年あためてきたテーマだった。
特別な宗教の信者ではないのだが、どうしても、手を合わせたくなる様なモチーフに惹かれる。見

ている人が、心が浄化されるような作品になればいいな、と思う。
先に、鳥獣戯画というユニークなモチーフを扱ったこともあった

が、ここ四五年は、木だけの作品にこだわって、聖母子像や、テレジア像などのキリスト教の世界や、お地蔵さまなど、仏教的なモチーフに挑戦した。
人形劇団を経て、人形の制作に入

った鈴木さんは、文楽の頭を習ったり、彫刻の先生について、制作を学んできたが、そのストリートな表現力は、彼女独特なものだ。これも、飾り気を嫌う素朴な木という素材のなせる技か。
「自分は、木に生かされている」という彼女の言葉が印象的だった。



(小川)

駒展 (早瀬康司)

5月31日～6月10日
東京都美術館

前衛芸術家のグループ展である駒展(こまてん)の会場出口付近に、細かなさいころ大の木が無数にちりばめられている。タイトルは、「駒展出口木偶日和」。

木彫人形作家の早瀬康司氏は、人形作家であることを厳しく自覚して生きている方が、氏のこんなぶつさらばうなユーモアのセンスが、私はとても好きだ。

注意してひとつひとつ、その木を見れば、ただ無造作に並べられたのではないことはすぐにわかる。氏は、江戸小物の制作も仕事

としているが、それらは全てこれから形になるうとしてる赤子や、恵比寿様、狛犬などの群れ

の。すべてがひとりの手仕事。何をかいいわんや、である。
その中に、ぼつぼつと、普通の大きな愛らしい関節人形などが置かれてる。彼は今、新しい工房に移り、「木偶庵・早瀬人形店」と名のり、意も新たに人形制作に打ち込むという。早瀬氏のこれからの活動を注目してい

(小川)



水無川リナ展

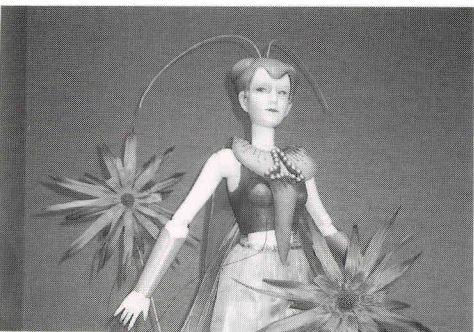
7月22日～31日
新宿せ・らる

大阪の若手実力派、水無川リナさんは、女性では珍しく、FRPで人形を制作する。

演劇に造詣の深い彼女は、そのまま舞台に通用しそうな、色彩やデザインに大胆な発想の作品が多い。テーマとして、拒否されているけど触ってみたい、という世界を表現したい言う。また、ボーボワールの「男も女も、女に惹かれる」という言葉を引用し、女性に

こだわっている。十七ページに掲載した「白痴」の女では、触ったら火傷しそうだけど、男が夢中になってしまうような女性を表現した。

大阪芸大卒業後、ディスプレイの会社でFRPなどの樹脂の素材に馴染んだ。退社後、人形制作を初めて七、八年になる。現在、スランプだというが、その中で、「白痴」の女を作るほどの人だ。次回展が楽しみである。(小川)



まず、DFJ創刊号の「会場使用案内」の、ギャラリーK1の記述に補足説明をしたい。人形展の予定が1回しかなく、人形展の応募大歓迎であった件で、オーナーの青山恵一氏より、ギャラリーK1は自然体でやることを一番大切にしている、特に人形展ばかりを無理に集める気はないということをお聞かせいただき、とのご指摘があった。実際、ギャラリーの予定は、来年の春まで写真展や絵画展で埋まっている。また、創刊号で提示した「使用料無料、出席自由」という条件も、あくまで青山氏のご厚意によるものだということを、ここにあらためて追記しておこう。



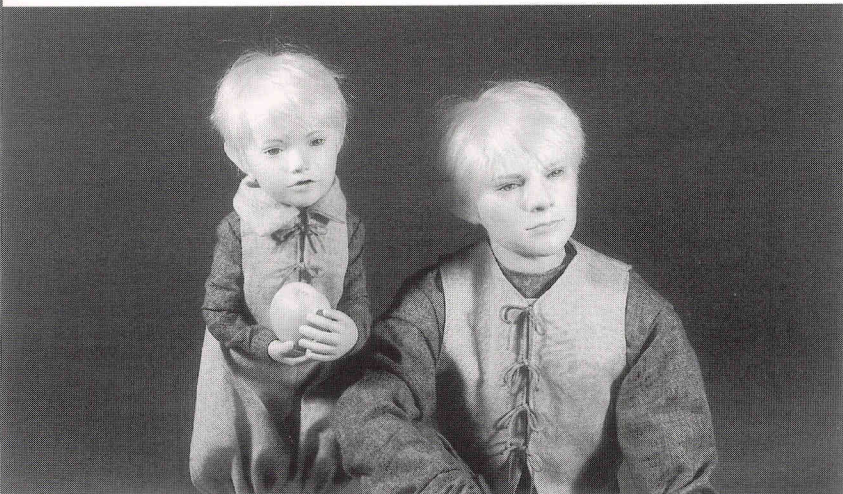
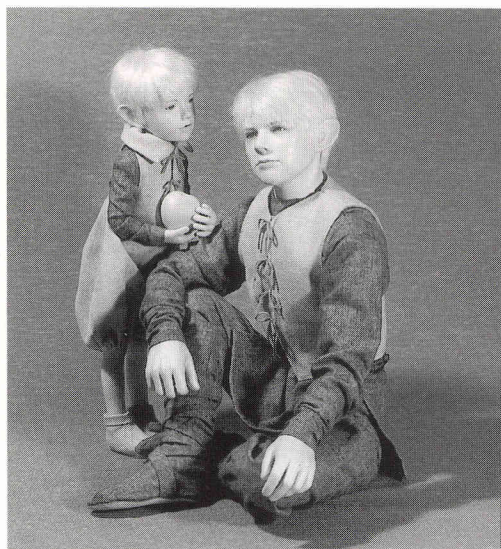
20年ほど前、青山氏は昔人形専門の古美術商を始めたが、6年前より、通りがかりの人も人形を落着いて見られるようにと、店内入口にカフェをオープンした。店は、中ほどから座敷になり古い和人形を中心にアンティークのスペースがギャラリーとなる。私が訪れたときは、雨にかかわらずお店は若い学生風の方で満員、居心地の良いアンティーク喫茶として喜ばれているようだった。店番をしていたアルバイトの日野さんに伺うと、「青山さんは前向きな方。人形の見せ方が違ふと

思う。いかに面白く見せるかということ、自分が楽しんでるようです」との弁。見える側のプロとしての、青山氏の創作人形作者への提言は興味深い。DFJ読者には、17ページの氏の手紙をぜひ一読頂きたい。「初めてなのに、懐かしい」とはある航空会社のコピーだが、青山氏の好きな言葉で、店作りの理想だというが、それは成功しているのではないかな、というのが私の感想だ。

昔人形青山ギャラリーK1

SCHEDULE

SCHEDULE 横浜 人形の家 〒231 横浜市中区山下町18 ☎045-671-9361 開館10時～17時 毎月 ◆バベットフェア 8/20-8/28 ◆伝統人形かしら展 9/23-10/10 ◆第7回アマチュア手作り人形展 10/22-11/20			
せ・ら〜る 〒106 新宿区歌舞伎町1-30-1 新宿PEPE 6F ☎03-3205-2673 10:30-20:00 年中無休 ◆人形グループ結布の会 9/22-9/30 ◆荒木野馬 3回展 10/2-10/10 ◆田口裕子 1回展 10/12-10/21 ◆渡辺素子 教室展 10/22-10/30 ◆本田明子 3回展 11/3-11/12 ◆山本七恵 2回展 11/22-11/30 ◆安岡都夫 3回展 11/22-11/30 ◆堀 佳子 人形展 12/2-12/10 ◆吉田良一 人形展 12/20-12/29	山口力靖・景子 二人展 「環る水」 9月30日～10月10日 (12:00-19:00 10/5は休廊) ギャラリー新光 神戸市中央区三宮町2-57 078-331-2313	ビリーボーイ 人形の世界 9月15日～9月29日 (10:00-19:00 9/21は定休日) スタジオ・コム (たち吉本店地下2階) 京都市下京区四條富小路 075-211-3143	高橋節子と ラ・バンボラ 創作人形組曲 '94夢彩色 10月19日～10月24日 松屋銀座 8階催事場 東京都中央区銀座3-6-1 03-3567-1211
昔人形青山 ギャラリーK1 〒603 京都市北区室町通 北大路下ル小山東大野町69 ☎075-415-1477 13:00-19:00 ◆出水かおり 創作人形展 12/13-12/23 *この秋、ギャラリー5周年を記念して、創作人形のためのアピール・ボックス設置を検討中。	いきとし生けるものの命の源である水。 時をその流れの中に包み、太古の記憶を我われに伝えてくれる。 常に形を変え水は環る。 様々な形態を持つ水をテーマに、絵画・人形そして合作と、制作してきた、カバーストーリーで紹介の山口夫妻の二人展。	パリの鬼オアーティスト、ビリーボーイによる、大人のためのファッションドール「ミッドヴァニイ」の世界を紹介。パービードールの世界的研究家としても知られる彼の知識とセンス、そして本物のオートクチュールの素材を駆使したエレガントな世界は、世界の著名人からも高い支持を受けている。	高橋節子主宰の創作粘土人形教室、ラ・バンボラの作品展。全国から103名が出品、作品数は200点にも及ぶ。構成内容は、ピクトリアンファッションからケイト・グリーナウエーの世界、ファンタジー、モダンイズム、オリエンタルへの回帰など多岐に富み、意欲が伺える。
赤川政由・ さとうそのこ二人展 10月28日 - 11月2日 ギャラリー・フレスカ 新宿区百人町1-10-11 ☎03-3362-0243 (新大久保2分)	長谷川裕子人形展 11月21日 - 11月27日 GALLERY OGATA 東京都中央区銀座6-7-2 滝山町ビル1F ☎03-3572-4727 11時～19時	妖精の森 与勇輝展 *引き続き国内巡回中。 9月1日～9月6日 横浜高島屋 9月14日～9月19日 岡山天満屋 9月29日～10月11日 札幌丸井今井 入場料一般700円、高大生500円(中学生以下無料)	



高さ 26cm. 素材: 粘土、和紙、水彩

「赤い木の実」

【作品と作者について】この作品は、森に住む木の妖精をイメージしている。もともと油絵をやっていたが、6年ほど前、岩切ドールを見たのがきっかけで人形にひかれ、4年前より岩切克樹氏に師事。現在に至る。自分の手の中で、自由に形の変化する粘土を楽しみながら、その時々イメージで、いい味が出たら嬉しいと語る。

連絡先: 埼玉県比企郡小川町青山1370-2

☆この「Coming on the Scene」では、デビュー直前の新人の作品を紹介致します。写真での応募をお待ちしています。

教室案内

ミワ・ドール・アカデミー

ビスク・ドールの創作人形の歴史は日本では浅く、作家の数も少ない。ミワ・ドール・アカデミーを主宰する三輪輝子さんは、十五年ほど前、材料も教室もない状況で、手探りで技術を磨いてきた実力派である。

東京芸大で日本画を専攻した三輪さんの繊細な美意識になるビスクドールはファンも多い。

アカデミーではまったくの初心者から、高度な技術を求める上級者まで、各種のクラスが設定されているが、上級者は、世田谷区砧にあるミワ・ドール直営のショップでの人形展示販売や、ジュモの工房のように分業制作をするためのミワ・ドールの制作スタッフへの道も開か



教室・学校名	住所/TEL	開講日時・講師陣	授業料
竹取物語人形学校	〒171 東京都豊島区目白 3-17-27 ☎ 03-3954-3395	月・創作市松人形(宮崎優人) 10:00-13:00・月3回 火・創作抱き人形(竹村和子) 10:00-12:30、14:00-16:30・月4回 水・着物縫い方(桑原静江) 10:30-13:00、14:00-16:30・月2回 木・創作抱き人形(小林三千子) 10:30-13:00、14:00-16:30・月4回	入会金 ¥20000 月謝 月 ¥10750 火 ¥13000 水 ¥8500 木 ¥13000 *入学随時受付
ビッグマリオン 人形教室	〒158 東京都世田谷区 奥沢6-28-14 林J-201 ☎ 03-3704-3730	月・福島光太郎 A講座 10:30-13:00、14:00-16:30 B講座 18:00-20:30 火・渡辺素子 A講座 10:30-13:00、14:00-16:30 木・吉田良一 A講座 10:30-13:00、14:00-16:30 B講座 18:00-20:30 金・吉田良一 A講座 10:30-13:00、14:00-16:30 土・吉田良一 13:00-15:30、16:30-19:00 日・吉田良一(原則として第1・3日曜日) 10:30-16:30	月4回 1・8月は月3回 入会金 ¥20000 設備費・毎月1000 月謝 ¥12000
ART モマユ 所由紀子人形教室	〒206 東京都多摩市貝取 2-5-3-506 ☎ 0423-76-1294	所 由紀子(月3回) 第1・2・3金曜日 10:00-12:30	月謝 ¥9000
岩切人形工房	〒186 東京都国立市東 1-3-15国立タイナプラザ106 ☎ 0425-71-3221	岩切 克樹 水曜日 18:30 - 21:30 金曜日 13:00 - 16:00 土曜日 13:00 - 16:00、18:30 - 21:30	入会金 ¥15000 月謝 ¥13000
藤井 路以教室	〒173 東京都板橋区 中丸町39-2-104 ☎ 03-3530-6598	藤井 路以 火曜日 19:30 - 21:30 金曜日 16:00 - 18:00 日曜日(月1回・第4日曜日のみ) 12:00 - 18:00	入会金 ¥20000 月謝 ¥12000 雑費(月) ¥500 *火・日は入会可能
ドール・サロン麻生	〒194 東京都町田市 玉川学園2-11-7 ☎ 0427-20-1423	麻生 やや *ビスク中心。創作、球体関節、レプリカ等 日時については、直接お問い合わせ下さい。	入会金 1万円 月1回クラス(2h)3千 月2回クラス(4h)6千
ミワ・ドール・ アカデミー	〒157 東京都世田谷区 祖師谷3-12-1 サマー成城103 *本部(11:00-18:30) 世田谷区砧8-26-1 ☎ 03-3415-3800	三輪 輝子 ・土曜 午前クラス10:30-12:30(月謝16000) ・土曜 午前クラス13:30-16:30(月謝20000) ・第1、3土曜クラス 10:30-16:30(月謝17000) ・第2、4土曜クラス 10:30-16:30(月謝17000) *10回チケット制(12回のうち2回休み) 38000円 午前・午後は選択可	入会金 15000円 設備費 1800円 月謝は左表参照
三越文化センター 布と綿で遊ぶ 創作布人形	〒104 東京都中央区 日本橋室町1-4-1 ☎ 03-3274-8595	松原 登代子・佐々木 明子 ・毎月第2水曜日 13:00-17:00 6か月6回	入会金 6000円 (3年間有効) 受講料 27000円
創作粘土の会 ラ・バンボーラ	本部アトリエ 〒177 東京都練馬区 石神井台1-12-11 ☎・FAX 03-3997-8687	高橋 節子 教室日 月・木・金 (月2回 10:00~15:00) クラス:初級、中級、上級、研究科、講師科 *本部講師派遣教室 ・読売文化センター・北先住、浦和、横浜、 横須賀、藤沢、金町、荻窪(人形・アトリエ-7) ・西武カルチャースクール池袋 その他全国各地に教室があります。お問い合わせ下さい。	入会金 15000円 月謝 12000円

横浜人形の家 第7回 アマチュア 手作り人形展

—— 作品募集のお知らせ

今年で7年目になる横浜人形の家恒例のアマチュア人形展。プロ、セミプロでなければ、誰でも参加できる。

- テーマ・素材：自由
- 1人1作品
- 応募方法：所定の出品申込書を10月7日まで提出。
- 展示期間・場所
H6年10月22日～11月20日 10-17時
横浜人形の家3F 企画展示室
- 主催 横浜人形の家
協力 横浜人形の家友の会
- 問合わせ先

〒231 横浜市中区山下町18
横浜人形の家・担当：小原・平元
☎045-671-9361

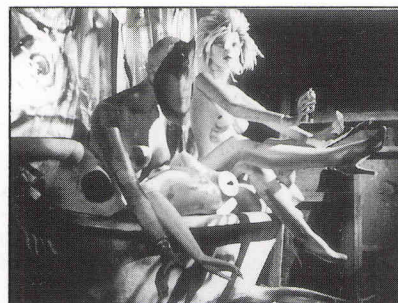
ービデオ紹介ー イジイ・バルダ 闇と光のラビリンス

VHSカテー 1時間57分 4作品収録

人間に忘れ去られた廃屋で、古き良き家族を演じる壊れかけたマネキンたちの世界。関節をきしませながら、毎日夫にペンキのスープをつくる剥れかけた顔を持つ「美人」妻。この「見捨てられたクラブ」の他、手袋が主役の「手袋の失われた世界」などと、どれもが実験的な試みをしていながら、それぞれに美しくも妖しいエロティシズムを漂わせている。ストーリーは大変わかりやすく、暗い映像を扱いながら、ユーモアも交え見終わった印象は、意外にも軽い。

イジイ・バルダはチェコの人形劇アニメで有名なトルンカ・スタジオを経たチェコ実験アニメ作家。

このビデオの発売元のダゲレオ出版では、他にもシュワUNKマイケルやクエイ兄弟などのアバンギャルドな作品を扱っている。



*ビデオ購入方法

- 1 特約店 (WAVE, ヴァージンメイト、HMV、アルヴィヴァン、イメージフォーラム) で購入
- 2 全国の書店での注文販売
- 3 郵便振替による通信販売
用紙にタイトルを明記の上、
ダゲレオ出版 (東京2-57921)
税込み代金8755円を送金。
*ダゲレオ出版 03-3357-8046

海外よりの メッセージ

*DFJ創刊に対し、海外の人形関係者より、励ましのメッセージが届きました。

♣ 既にプロのような出来栄の雑誌を祝福します。まったく読めないのが残念！

フランス現代芸術人形クラブ
会長インゲボルグ・リーセ

♣ DFJを本誌でも紹介しましょう。ドイツの作家の情報も送ります。DFJの成功をお祈りします。

Verlag Puppen & Spielzeug 誌
フランク・ボルファルス

♣ DFJをととても楽しく拝見しました。来年、日本に行くのをとても楽しみにしています。

GDS会長キャロル・スタントン
♣ おめでとう！日本には、素晴らしい作家がたくさんいるのですね。尊敬します。表紙は、額に入れて飾っておくわ。

NIADA 会長ヘレン・キッシュ

♣ 日本の作家について、とても興味があったの。記事の交換ができるなんて、とても嬉しい。

オーストラリア

Dolls & Miniature 誌
ダイアン・ハーグリーブス

*DFJは今後、オーストラリアのDolls & Miniature 誌と情報の交換をすることを約束しました。

*その他、たくさんの関係者の方からお祝いの言葉を頂きました。



GDS からのお知らせ

イギリスに本部をおく、世界的な人形作家の組織、グローバル・ドール・ソサエティ (GDS) より、日本にむけてニュースがあります。

■今年10月6日から9日まで、ドイツのローテンブルグで、GDSの総会があります。ワークショップやパーティー、コンペティション、展示会などのプログラムがあります。日本からは、岩切夫妻、所由紀子、福島弘太郎など、七名の方が無審査の作家として指名されています。参加希望の方は、会員登録と参加登録を早急に済ませて下さい。

■コンペティションの前に、リンバークという都市で、日本の講師による市松人形のワークショップも開かれます。

■来年2月には、GDS会長のキャロル・スタントンが来日。アンティークのレプリカ人形の講習会を行う予定です。

以上のことに関する問合せは下記へ
大阪府吹田市津雲台2-1 C-13 -101
朝倉 和子

大阪から

去る6月20日、DFJ事務局長の小川は、大阪でGDSの日本の連絡窓口の朝倉和子さんと、在米中フランス人形のレプリカの品評会で賞を総なめにしてきた黒田恵子さんに会った。二人は、その場でDFJに入会、エールを送って下さった。

左：朝倉さん 右：黒田さん

DFJ ビデオを見る会

DFJ事務局長、小川千恵子が誌面で伝え切れなかった、NIADAやニューヨークの情報を、写真やビデオを見ながら、談笑する会を持ちたいと思います。アメリカで購入してきたドール・アーティストに人気のある粘土や、参考書籍の展示もします。

具体的日程、場所は、追って会員の皆様にお知らせ致します。(会場によい場所があったら、教えて頂けると助かります。)

問合わせ先：DFJ事務局

*DFJは、次代の育成を目指すため、国内の美術大学、美術関連校に届けられています。また、海外の人形専門誌、関係者には、英語のガイドライン付きで、届けられています。

引っ越しました

*工房の移転

早瀬康司

〒196 昭島市朝日町3-8-6-103

木偶庵 早瀬人形店

☎0423-42-5867

近況報告

このページでは、活躍中の作家の最新作をご紹介します。

岡田好永

「とびうお」 写真・塩野谷みちる

高さ120cm 桐塑、胡粉、杉の根

住所：東京都八王子市東浅川町546-19

サニーハイツ403



水無川リナ

「白痴」の女

高さ53cm FRP製

アトリエ：大阪府泉佐野市旭町1の23

□私は、今年の春に人形を作り始めました。それまでは、無類の人形好きで、コレクションのほうは、アンティークのビスクドールからバービーまでいろいろ集めていました。

友達の一人が遊びに来た時「人形ばかり集めてないで、自分で作らないよ！」と東急ハンズで、子供用の工作粘土を買って来てくれたのが人形作りのきっかけでした。その粘土で生まれて初めて作ったのが写真の全身人形です。慣れない粘土に振り回されて、一週間以上もかかって何とかでき上がりました。まだまだ思いどおりとは程遠い出来ですが、絵ではとても味わえない異常な程の満足感、充実感！自分の頭の中の人物が立体になって現れる感動は本当にすばらしいものです！……（略）

送って頂いた創刊号を何日も夢中で読み返してしまいました。知りたいと思っていた教室の案内や、今までほとんど知らなかった人形作家の方の作品を知り、大感激です。

（略）これからもいろいろな人形作家の方々の作品を写真入りで見せて下さい。

【目黒区・尾崎信子】



■初めての人形って新鮮でいいですね。作者の洗練されたセンスも感じられます。このようなお手紙をいただき、こちらも大感激です。DFJを作って良かったよしみじみ思うひとときです。DFJはまだまだこれから。読者の方々の多くの意見、ご感想をお待ちしております。

□ドール・フォーラム・ジャパンはとても読んで楽しく、また情報も多くてこれからもずっと続けてほしいと思います。私も人形が好きで、趣味で少しずつ作っております。自分で個展を開くほどの作品もないので、できましたら趣味で作られている方々の人形展があると嬉しいのですが。（略）

私の作品の写真を同封します。五、六年前に作りユザワヤなどに出品しました。気に入っている作品です。（略）

次回のドール・フォーラム・ジャパンを楽しみにしております。私は、大谷博子さんの作品が大好きです。希望ですが、大谷さんのインタビュウが近況を知りたく思います。

【横浜市 石渡紀子】



■横浜の人形の家ではアマチュア人形展がありますね。DFJもNIADAのクリティークのような新人の批評・展示会のようなものができないかと模索中です。それまでは、誌上での紹介をさせて頂きますので、読者の方々のお写真をお待ちしております。

□堀柳女さんや平田郷陽さんの作品を実際に見るには、どこに行けばいいのですか？

■横浜の人形の家や近代美術館には収蔵されていますが、一般公開はされておらず、また公開の予定もありません。個人で見せて頂くのは、相当無理があるようです。個人のコレクターが持っているもの

もありありますが、製作年によりかなり作風も変わるし、また紹介などがないと見せて頂くのも不可能でしょう。そのような訳で、絶望的な状況なのですが、希望としては、来年、近代の人形の展覧会の企画があるそうです。場所や時期は未定ですが、分かり次第、誌上でお伝えします。

■取材時、不在であった昔人形青山ギャラリーK1の青山氏からこのような手紙が届きました。プロを目指す方はぜひ参考にして頂きたい意見です。

□（略）従来のただ、作品を作って、見てもらって、評価を待つ、ということだけではなく、もっと、作家意識を持った、積極的な活動が、作者にも必要ではないかと五年間のギャラリー活動を通して感じました。

それには、一体、自分でも、どこに蒔いたかを忘れるくらいにいつぱい種蒔いておくのもひとつの方法で、そのうち、思いもかけぬところから、芽が出てくるものです。往々にして、一回目の個展というものは、嬉しくもあり、自分の技術や世界を、詰め込みすぎて、またまりに欠ける場合も多いのですが、それも二回、三回と重ねていくことで、製作した作品に、時間的な区切りもつき、テーマ性もはっきりして、ファンも増えていくというもので、どんどん産み捨てるように、個展を重ねていく時期が必要な気がします。

人に観てもらおうという以前に、まさしくそれは、自分の中で、区切りをつけて、成長していくための行為なのですから、大体において、近頃では、たった、一回や二回の個展に、かけすぎる、きらいがあります。

他のことでも云えますが、一、二度動いただけで、自分の運命が、コロリと変わる

ることなど、この世には、殆どないので、変わるとすれば、着実にゆっくりと、変わっていくしかないでしょう。

そして、ギャラリーを、ただの展示の壁面と考えている人も、アウトで、それなら銀行のロビーや、駅の待合室を利用すれば、便利だし、人も多い。

大切なのは、「いかに、作品を観せるための空気が流れているか！」で、それは、ギャラリーの広さや、交通の便には、関係ない（と、狭くて、不便な場所にあるギャラリーのオーナーが云うのも、説得力に欠けますけれど……）

「作品を観せるための空気」は、立派な美術館やギャラリーに、必ず流れていると云えず、同じスペースでも、流れている時と、そうでない時もあるって、それは作品の巧拙にもあまり関係ないようです。

要は、作品とスペースと人との共同作業で、最後の仕上げの、ここが一番大切で、面白い作業なのに、作品を作りあげた時点で、作者は、息切れしてしまうのか、展示にまで頭がまわらない人が多いのも、現状です。

平面である絵画よりも、立体である人形の展示のほうが、平板な展覧会が多いのも、考えてみれば不思議なことで、作品の巧拙にかかわらず、自分の作品を、徹底的に把握することが、大切ではないでしょうか。

結局、作者もオーナーも、その期間、その作品と空間に、いかに惚れ込んでいくかが感じられれば、成功で、そんな時には、このギャラリーは、まるでこの作品のためにだけ、造られたかの如くに、見える気がします。（略）これが今の僕のギャラリー活動における、正直な気持ちで、ご了承頂ければ、幸いです。

【昔人形青山ギャラリーK1 青山 恵一】

読者の紙面への参加をお待ちします。お手紙をお待ちしています。

【投稿】本誌への感想、希望、質問、人形に関することなど、何でも結構です。

【CS】デビュー直前の新人の作品を紹介します。制作歴は問いません。まず、検討のために、作品全体の分かる写真をお送り下さい。タイトル、素材、サイズもお忘れなく。

【REVIEW】個展・展覧会の感想をお寄せ下さい。

*以上の採用分には、リーセ葉書セットをお送り致します。

【INFORMATION】ニュースがあったら何でもどうぞ。

【希望】こんな記事があったらいいというものをお知らせ下さい。

【近況報告】プロの作家の方の3か月以内に制作された作品発表の場です。応募はCSに準じます。(採用分には、規定稿料をお支払いします。)

【教室・個展ほかの案内】随時受けつけます。

*応募は、宛名に各項目明記の上、DFJ事務局まで

DFJ購読方法

DFJ(ドール・フォーラム・ジャパン)は年に4回、5・8・11・2月に発行されます。購読は会員制です。

購読希望の方は、年会費5千円を、ご住所・☎を明記の上、下記までご送金下さい。入金確認後、会員登録をいたします。

◎郵便振替 東京00120-8-717693 ユーラシア・ドールズ
(5月より番号が変更になりました)

編集後記

ドール・フォーラム・ジャパン事務局長 小川千恵子

裂や布は人形には本質的にかかわっています。創作人形の流れに大きな影響を与えた堀柳女さんや辻村ジュサブロー氏などには、裂に対する執着が出発点ではなかったかと思えるような記述がみられます。今回は、「裂と人形」という非常に大きなテーマを掲げましたが、布や裂が人形にとって普遍的な素材である以上、このテーマでは、何回となく特集ができることでしょう。

DFJ創刊号への反響は、嬉しくも、非常に好評で、読者の方々ははじめ各方面の方々から、たくさんのあたたかい励ましの声をいただきました。皆さんの期待が大きいだけにこれからはいいかげんなものは出せない、という身の引き締まる思いもします。

ところで、私はこれを書いているのが、入稿直前の深夜。よくあるパターンですが、資料とメモの山の中で、悪戦苦闘しております。頼んでおいたリサの写真が、やっと届き、つい先程電話で掲載のOKを取ったばかり。これで何とか2号も、無事に作業が(一週間前から悲願の)終了に近づきました。今回は、アメリカの情報を多く取り入れましたが、いかがでしたでしょうか。

NIADAで、私が多くの友人を得、有意義な時を過ごせたことは、ひとえに日本のアーティスト・ドールの素晴らしさと、彼らの温かな人間性のおかげです。

いつかNIADAのような豊かな交流の世界を目指したいと、たくさんのアイデアをお土産に帰って参りました。会員の皆様と共に、DFJが一步步前進していくことができれば、幸いです。

1994年8月9日

ドール・フォーラム・ジャパン第2号

1994年8月23日発行

編集・発行 ドール・フォーラム・ジャパン事務局

〒189 東京都東村山市久米川町3-27-57

☎ 0423-95-7547 FAX 0423-95-7975

編集責任者：小川千恵子

印刷：(株)ヒデジマ

ドール・フォーラム・ジャパンはユーラシア・ドールズのスポンサーシップにより運営されています。

個展の予定のある方へ

DFJ発送時、DMを同封致します。200枚。無料。次回締切 10/31

訂正とおわび

DFJ創刊号「Information」にて、因間里佳さんのお名前を「引間」と表記しましたが、これは誤りですので、ここに謹んでお詫びし、訂正致します。

*本誌掲載の記事・写真の無断転載・複写を禁じます。

ユーラシア・ドールズの通信販売

〒189 東京都東村山市久米川町3-27-57

TEL 0423-95-7547 FAX 0423-95-7975



ソフト・グラス・アイ®

マスターピース・アイ社

世界初シリコン製のソフトな人形の目
3タイプ23サイズ、全50色。またカラーチャートを



リーセ葉書セット

5枚セット、会員¥800

大好評、本誌紹介の
マダム・リーセが自身で撮影



スーパースカルピー

453g 会員¥1500

欧米で人気の合成粘土。家庭用オーブン使用

お申し込みは、同封の注文用紙をご利用下さい。DFJ会員の方は、「DFJ」欄の価格でお申し込み下さい。

DFJ会員は、特別価格でお求めになれます。

ウタ・ブラウザー 「ファンキー・ガール」

特別キャンペーン DFJ価格 7万2千円

本誌創刊号で紹介したNYのドイツ人アーティスト。

ヘッド・手足は磁器製。すべて手作り。52cm

ダンスを踊るような様々なポーズがつけられる。

デザインの豊富なウタはカタログを製作予定。



アキラ・ブラント 「松ぼっくりの妖精」

特別キャンペーン DFJ価格 8万円

今号紹介のアキラ・ブラントの作品。マスクなし

布製、松ぼっくり。ポーズ人形。すべて手作り。40cm

他にもデザイン、サイズにバリエーションあり。ご興味のある方はご連絡下さい。（受注後、制作を依頼します）

EurasiaDolls

ユーラシア・ドールズ〒189 東京都東村山市久米川町3-27-57 ☎0423-95-7547 FAX 0423-95-7975

*リサ・リヒテンフェルの作品に興味ある方も、お問い合わせ下さい。